心霊科学の成立条件

——19 世紀後半における科学と非科学の境界——

東京大学 松村一志

1　目的

この報告は、19 世紀後半における心霊科学の流行を、科学社会学的な観点から分析するものである。心霊科学とは、ポルターガイスト現象・心霊写真・テレパシーといった心霊現象に関する科学的研究である。心霊現象は、現在では単なるオカルトと見なされている。ところが、19 世紀後半の段階において、それらは必ずしも科学の対極に位置するわけではなかった。実際、著名な科学者の中には心霊研究に従事した人々がいた。そうした科学者は、自身の心霊研究が科学的であると主張し、学会や雑誌を設立した（Oppenheim 1985=1992）。では、心霊研究はなぜ科学だと見なされえたのか？本報告は、この問題の考察から出発し、19 世紀の科学が持っていた過渡期的性格を分析する。

2　方法

従来よく見られる説明は、心霊現象が当時の心理学や物理学における最先端の現象（無意識や電磁波）と近接しており、それゆえ科学の対象になったというものである。しかし、このような説明は、あくまで科学者が心霊現象に関心を向けた理由を説明するにすぎず、心霊研究が科学と見なされえた理由までは説明できない。そこで本稿は、心霊研究をめぐる論争の事例を取り上げ、当時の科学者が行なっていた科学と非科学の境界画定作業（Gieryn 1983）を分析する。

3　結果

本報告が取り上げるのは 1870 年代のイギリスで起きた物理学者ウィリアム・クルックスと生理学者ウィリアム・ベンジャミン・カーペンターの論争である。クルックスの心霊研究を、カーペンターは痛烈に批判した。現在であれば、「心霊現象には再現性がない」というタイプの科学方法論に基づく批判が一般的だろう。その場合、争点は科学的方法の内実になる。ところが、両者の議論は、科学的方法の内実へと向かうのではなく、むしろ実験の「目撃者 witness」の信頼性へと向かった。

4　結論

科学論の成果によると、17 世紀イギリスの王立協会では、実験報告が「証言」と見なされていた。そこでは、実験の正しさが「目撃者」の地位や人数により決定された（Shapin et al. [1985]2011 = 2016）。裏を返すと、「目撃者」が信頼できれば、実験報告は科学として認められることになる。本報告の事例が示唆するのは、19 世紀の科学にも、こうした仕組みが残っていたことである。心霊現象の科学者は、この仕組みに依拠することで、心霊研究を科学的なものにしようとしていた。

文献

Gieryn, Thomas, F, 1983 “Boundary-work and the demarcation of science from non-science: strains and interests in professional ideologies of scientists,” *American sociological review*, 48(6): 781-795.

Oppenheim, Janet, 1985, *The Other world: Spiritualism and psychical research in England, 1850-1914*, Cambridge, NY: Cambridge University Press. (= 1992, 和田芳久訳 『英国心霊主義の抬頭』 工作舎.)

Shapin, Steven and Shaffer, Simon, [1985]2011, *Leviathan and the Air-Pump: Hobbes, Boyle, and the Experimental Life (second edition)*, Princeton and Oxford: Princeton University Press. (= 2016, 吉村秀之監訳, 柴田和宏, 坂本邦暢訳 『リヴァイアサンと空気ポンプ: ホッブズ、ボイル、実験的生活』名古屋大学出版会.)